



**QUEEN'S
UNIVERSITY
BELFAST**

最近のバッハ研究から 第五回 バッハvsマッテゾン。同時代の理論家と対峙するバッハ

Tomita, Y. (2020). 最近のバッハ研究から 第五回 バッハvsマッテゾン。同時代の理論家と対峙するバッハ. *Jupiter: 住友生命いずみホール音楽情報誌*, (185), 10-11.

Published in:

Jupiter: 住友生命いずみホール音楽情報誌

Document Version:

Publisher's PDF, also known as Version of record

Queen's University Belfast - Research Portal:

[Link to publication record in Queen's University Belfast Research Portal](#)

Publisher rights

Copyright 2020 The Author.

General rights

Copyright for the publications made accessible via the Queen's University Belfast Research Portal is retained by the author(s) and / or other copyright owners and it is a condition of accessing these publications that users recognise and abide by the legal requirements associated with these rights.

Take down policy

The Research Portal is Queen's institutional repository that provides access to Queen's research output. Every effort has been made to ensure that content in the Research Portal does not infringe any person's rights, or applicable UK laws. If you discover content in the Research Portal that you believe breaches copyright or violates any law, please contact openaccess@qub.ac.uk.

Open Access

This research has been made openly available by Queen's academics and its Open Research team. We would love to hear how access to this research benefits you. – Share your feedback with us: <http://go.qub.ac.uk/oa-feedback>



画像1

などの素材そのもの、形式・様式上の特徴などから周辺状況に答えを求めたりといったアプローチが主流になりつつある。そのひとつに、マッテゾンからの刺激と挑発が由来となったと疑われるものが《平均律クラヴィーア曲集 第2巻》に数曲あるので、今回はそれを紹介したい。

書物と楽譜の応酬!?

ヨハン・マッテゾンは、バッハと同世代の音楽家だが、楽理論家・批評家として大成し、重要な理論書を多数執筆し出版している。そこにはバッハに関する記述もたびたびみられ、『庇護されたオルケストラ』Das beschützte Orchester (1717年)ではオルガニストとしてのバッハを高く評価していたものの、5年後に刊行された『音楽批評 第1巻』(Critical Musica 1722年)では、バッハのカウンター・アリアの作風を敢えて揶揄している他、その後の『大通奏低音教程』(General-Bass-Schule 1731年)や『旋律学の核心』(Kern melodischer Wissenschaft

(1737年)でもバッハの作品にかなり否定的なコメントをしており、後者では「バッハの教会音楽は常に人為的で不自然」とまで言い切つてしまつている。《平均律第2巻》の編纂が丁度本格的に始まつた時期に、マッテゾンは「完全なる楽長」Der Vollkommene Capellmeister (1739年)を発表する **画像1**。出版はハンプルルクのクリスティアン・ヘルドル社が担つたが、印刷はライプツィヒで行われた。そのため、バッハが出版前の仮刷りでもみた可能性も指摘されている。この書には、次のような興味深い一節があるからだ。

「1737年)でもバッハの作品にかなり否定的なコメントをしており、後者では「バッハの教会音楽は常に人為的で不自然」とまで言い切つてしまつている。《平均律第2巻》の編纂が丁度本格的に始まつた時期に、マッテゾンは「完全なる楽長」Der Vollkommene Capellmeister (1739年)を発表する **画像1**。出版はハンプルルクのクリスティアン・ヘルドル社が担つたが、印刷はライプツィヒで行われた。そのため、バッハが出版前の仮刷りでもみた可能性も指摘されている。この書には、次のような興味深い一節があるからだ。

「1737年)でもバッハの作品にかなり否定的なコメントをしており、後者では「バッハの教会音楽は常に人為的で不自然」とまで言い切つてしまつている。《平均律第2巻》の編纂が丁度本格的に始まつた時期に、マッテゾンは「完全なる楽長」Der Vollkommene Capellmeister (1739年)を発表する **画像1**。出版はハンプルルクのクリスティアン・ヘルドル社が担つたが、印刷はライプツィヒで行われた。そのため、バッハが出版前の仮刷りでもみた可能性も指摘されている。この書には、次のような興味深い一節があるからだ。

連載

最近のバッハ研究から 富田 庸



第五回

バッハ VS マッテゾン

同時代の理論家と対峙するバッハ



それ以前のバッハが書いた事例は見当たらない。これこそマッテゾンの挑発へのバッハなりの回答ではないだろうか。

同書にはもうひとつ気になる記述がある。転回対位法技法に関する箇所だ。彼はまず8度の転回対位法(2つ声部のどちらかをオクターブ移動し転回すること)で2声部間の音程が変わるものの、和声的な問題は発生しない)をまず解説し、10度と12度の転回対位法を説明するのだが、10度が「最も難しい」と述べており、譜例を使つて

「丁寧に解説している。 **画像2**、第424頁より抜粋)」

さて、『平均律第2巻』にて、バッハは10度の転回対位法を駆使したフーガを書いている。第16番短調だ。(ちなみに、これは《平均律第1巻》では使われなかった技法だ。この技法を使うことで、3度や6度による主題の重複が可能になり、音楽を強烈にかつ劇的に展開できるようにするのである。マッテゾンの味気なく陳腐な譜例にバッハが強烈な反撃をしかけたかのようだ。実はこれと類似した書体が

見え隠れする人間ドラマ

最後に、マッテゾンの同著書の第164・166頁にて、リズムに関する議論が譜例とともに展開されている箇所を眺めたい。列記されている9種類のリズムのうち、3種類が《平均律第2巻》のフーガの主題に認められるの



画像2

これは何を意味するのだろうか。

リズム名	マッテゾンの譜例	《平均律第2巻》のフーガの主題
Spondaeus (----)		
Tribrachys (vvv)		
Bacchius (v--)		

表

「ここまで来ると、もはやバッハはマッテゾンの挑発に対し、徹底的に対峙しようと思つていたとしか思えない。マッテゾンがこの《平均律第2巻》を入手していたのかどうかは不明だ。1742年には二心編纂も完了していたので、バッハが筆写譜を一冊送りつけてきた可能性も無きにしも非ずだ。ただ、この作品の続作として取り掛かったものの、没後の1751年まで出版されなかった《フーガの技法》に対し、マッテゾンは「この有用で豪華な作品は全てのフランスやイタリアのフーガ作家を驚嘆させるだろう」と惜しみない賞賛の言葉を贈っているのだ。もはや挑発できなくなったバッハへの哀悼の意と尊敬の念が滲み出ているように感じられてならない。

掲載画像 from Wikimedia Commons